



ベルカント唱法で  
日本の音楽界を形作っていった巨人

## 下八川 圭祐

東成学園創立者

1900 - 1980

### Profile

1900年高知県高岡郡佐川町生まれ。26年に東洋音楽学校(現・東京音楽大学)を首席で卒業後、音楽活動を開始。名バス・バリトンとして多くの役を演じ、特に『カルメン』のエスカミリオは当たり役だった。40年には東京声専音楽学校を設立。学校法人東成学園の開祖であり、多くの名舞台に出演しながら、ベルカント唱法を伝えるべく熱い指導を行い、多数の音楽家を輩出。日本のオペラ黎明期を支え続けた。72年藤原歌劇団総監督就任。80年没。

20代からバス・バリトンとして活躍しながら、後進の育成のために研究所を設立。ベルカント唱法による歌を自らの進むべき道として、その歌声を体現しつつ教育にも邁進した。東京声専音楽学校創立後は、教え子たちの「親父」のような存在となり、育て上げた名音楽家は数知れず。日本の音楽界に「歌」を根づかせた、破天荒にして偉大な巨人。

### 日本のオペラの将来を見据えて

1900年に高知県に生まれ、80年に東京で亡くなった下八川圭祐の生い立ちについては、本編で詳しく描かれている。特に、東洋音楽学校卒業後の1930年、わずか29歳にして声楽家の育成のために「下八川圭祐声楽研究所」を設立したことが注目される。それが東成学園の源流だったというだけでなく、日本の音楽界全体の発展を見据えて行動を起こしたという意味においても、実に大胆かつ合理的な決断だった。

さらに、同年には、名歌手アッティリオ・ベレッティが指揮を務める公演にて、『道化師』(レオンカヴァッロ)のトニオ役で舞台の本格デビューを果たした。ここでベレッティと出会い、師事したことで、「本格的なイタリアの発声法を学んだ」(下八川圭祐)と考えられる。それはいまでいう「ベルカント」とは違うものだった可能性があるにせよ、それまでの日本のクラシック音楽の主流であった重いドイツ系の発声ではなく、「イタリアの明るい発声を受け継ぎ」(同上)、これからの日本の声楽が目指すべき道と確信したのである。



東洋音楽学校入学当時の下八川。

### ベルカント唱法に出会って

1930年代には、藤原歌劇団の前身の旗揚げ公演に参加し、一番弟子の東海林太郎と永田絃次郎が音楽コンクールで入賞するなど、演奏と指導の両面において成果をあげ始めた。さらに、世界的声楽家の来日のためには私財を投じることも厭わず、あらゆるチャンスを逃さぬように動き続けた。その最大の成果が、ベルカント唱法と

の関わりである。

下八川はベレッティとの出会いのち、フェルッチョ・タリアヴィーニやアリゴ・ポーラといった真のベルカントの柔らかい歌い方、無理のない美しい発声法を身につけた名歌手たちとの共演を重ねた。そのなかで「日本式のベルカント」ともいべき発声法を見つけ、それを体現し、広く伝えていくことを自らの使命とした。

「教育というものに関して、いまでは考えられないほどの強い思いがあり、強い指導力があつた」(星出豊)

下八川は、その情熱の結晶として、40年に東京声専音楽学校を設立、現在の昭和音楽大学まで継がれていく土台が出来上がったのである。

### 「歌」を伝えること

ヨーロッパで名声を博していた「マダム・ミウラ」こと三浦環の帰朝公演『蝶々夫人』(プッチーニ)の際、三浦の「お墨つき」でシャーププレスに抜擢されたほどの歌唱力を維持しながら、多くの公演制作に関わり、指導の幅も広げていった下八川。いまに伝わる彼の功績のなかでも、指導の場で伝えられた多くの教えは学生たちの胸に刻まれ、ひいては本学と日本オペラ界の大きな財産となっているのである。「圭祐先生は、声楽家としての基本が生活のなかに溶け込んでいました。例えば、どんなときもあごが上がるということが絶対にありませんでした」(井田安子)

下八川の指導といえば、東京声専音楽学校時代から本学の卒業生の多くが受けた発声練習を記憶している人も多いだろう。

「発声の時間が週1回ありました。手鏡を持ち、口の形を見ながら発声するのです。そういえば、東京声専音楽学校時代は、背広にネクタイ姿で発声の授業を受けていました」(的場辰朗)

「先生は前に立って、学生たちがちゃんとできているか目を光らせているのです」(井田安子)

この発声練習は、昭和音楽短期大

学開学後には、なんと作曲、指揮、器楽専攻の学生にも自ら指導したという。「声楽の歌う心を器楽に」という信条は、画一的で機械的な指導になりがちだった当時の日本の音楽教育において、すべての音楽表現の根本となる「歌」の重要性を気づかせる貴重な教えとなった。

### 日本オペラ界の巨人、学生たちの父

礼・節・技を何より重んじ、自身に対してもほかの教員に対しても厳しく、強い責任感で情熱的に指導する姿。一方で、オペラ界を代表する立場になっても、つねに学生と同じ目線に立ち、家族のような温かさで面倒を見続けた。どこまでも懐深く、「東京声専音楽学校はいわゆる学校という感じではなく、音楽を教えてくれた家庭みたいな感じでした」(菊池清)といわれる一体感を作り上げたのである。「亡くなるまで、彼を“先生”と呼ぶ人たちの面倒をみていました。僕はそれに報いなければいけないと思っていました」(星出豊)。教え子たちが振り返るように、ファミリーとしての一体感を自然に作り上げられる、「親父」のような存在だった。

本学には創立者・下八川圭祐の銅像がある。最大の当たり役、『カルメン』[ピゼー]のエスカミリオ役に扮した雄姿である。オペラに魅せられ、舞台に立ち続け、教え子たちの成長のためにすべてを捧げ、骨の髄まで舞台人であり教育者であった下八川。もっともふさわしい居場所に佇みながら、今日も本学の行く末を見つめ続けている。



東京声専音楽学校に設置された、自身の銅像前に佇む下八川。銅像は2体あり、写真の銅像は現在、北校舎に移設されている。

日伊音楽協会会員／  
全日本オペラネットワーク運営委員  
井田 安子 (S42年度東京声専卒)

菊池 清 (S39年度東京声専卒)

東成学園理事長  
下八川 圭祐

昭和音楽大学客員教授／指揮者  
星出 豊 (S38年度東京声専卒)

昭和音楽大学音楽学部長  
的場 辰朗 (S47年度短期大学卒)